

ベイズ統計学による心理学研究のすゝめ

岡田 謙介

2016年4月18日発行 (Ver. 1.0) ●発行元: ちとせプレス

いま、心理学の中でベイズ統計学を用いた研究が増えていきます。長年「傍流」とされてきたベイズ統計学が、最近になってなぜ見直されてきたのでしょうか。また、ベイズ統計学とはいったいどのような特徴をもつのでしょうか。「ベイズ統計学って聞いたことはあるけれど……」、そんな人に向けた、専修大学の岡田謙介准教授による「ベイズ統計学による心理学研究のすゝめ」。

Section 1

あれ、家を出る前にオープンの電源スイッチ、切ったかな？



お気に入りのレーズンベグルとチーズベグル。この原稿を書いている今日も食べました。

私は現在、米国カリフォルニア州で在外研究をしています。近くのスーパーマーケットで安く美味しいベグルが買えるので、朝食に焼いて食べるのが好きです。つい先日の朝、職場に着いてから、ベグルを焼いた後にちゃんとオープンの電源を切ったかどうか、ふと心配になりました。うちのオープンはアパートに

作りつけの大型のタイプで、ダイヤル型のスイッチを回して切らない限り、いつまでも電源が入りっぱなしになってしまうのです。

こうしたことで気をもんだ経験があるのは、おそらく私だけではない……と思うのですが、いかがでしょうか。家を出るときに玄関の鍵を閉めたかどうか、エアコンの電源を切ったかどうか、ふとしたはずみに気になって、思い出そうとしてもよく覚えていなくてモヤモヤすること。そして、実際には習慣化された行動として無意識のうちに鍵を閉めたり電源を切ったりしており、杞憂に終わることが多いこと。もしもこれが慢性化すると、強迫とよばれるような臨床的な症状に数えられてしまうかもしれません。ですが、頻繁にはないにしてもこれに類する経験が思い当たる方は、少なからずいらっしゃるのではないのでしょうか……？

今回も、結局のところオープンの電源スイッチは切っていました。このヒヤリとした朝を反省しながら、私はふと、こうした思考はもしかすると、心理学でいわれている基準率無視の認知バイアスの観点からとらえることもできるかもしれない、と思いました。この認知バイアスは、比率や確率についての一般的な情報と、より個別的・特定の情報が与えられたとき、多くの人が合理的な解よりももっと前者の情報を軽視し、後者を重視しがちになってしまうことを指します。2002年にノーベル経済学賞を受賞したダニエル・カーネマンと、エイモス・トヴェルスキーによる研究でよく知られており、心理学を学んだ方は「タクシー問題」や「感染者問題」といった代表的なカバーストーリーを耳にしたことがあると思います。近年でも日本発の研究の貢献も多い、面白い分野だと感じています。

基準率無視は、「確率計算によって求められる合理的な解」と「人間による直観的な認知」とが食い違ってしまう、という意味で、認知バイアスの1つであると考えられています。進化の過程で獲得されてきた人